

パラリンピックの理念と意義 ——時間軸と空間軸での観察——

小倉和夫

はじめに

パラリンピックについての認知度、知識、関心が一般に深まるにつれて、一部の競技の商業化、娯楽化が起りつつあり、同時にパラリンピック大会やそのムーブメントが本来持っているとされてきた社会的意義や効果についても再評価すべきと思われる状況が生まれている。言い換えれば、パラリンピックの意義、理念についてその原点と歴史を振り返り、同時にパラリンピックとある程度類似した国際総合大会あるいはムーブメントとの比較の上で、パラリンピックの意義、理念を再確認あるいは再検討する必要性が高まっていると考えられる。

こうした観点から、パラリンピックの理念をその原点に立ち戻り、歴史的に回顧するとともに、障がい者スポーツの国際総合大会として、デフリンピック、スペシャルオリンピックス、知的障がい者国際総合競技大会（VIRTUS (旧 INAS) グローバルゲームズ）、インビクタスゲームズとの比較の上で、パラリンピックの意義、理念を特に社会的、国際的観点から論じてみたい。

その際、理念の分析の次元を（１）シンボルマークから見る理念、（２）大会のスローガンに見る理念、（３）ルードヴィヒ・グットマン博士（Ludwig Guttman）の言辞に見る理念、（４）開閉会式のスピーチに見る意義と理念、（５）開閉会式の演出、メダル、賛歌に見る理念、（６）ファン・ヨンデ賞受賞者の功績から見る理念、（７）主な障がい者スポーツ国際総合大会の理念との比較、（８）全国障害者スポーツ大会の理念との比較の八つに分けて観察、分析することとした。

1. シンボルマークから見るパラリンピックの理念

パラリンピックの原点とされる英国ストーク・マンデビル病院の患者によるアーチェリー大会が国際化した当初は、SMG（Stoke Mandeville Games：ストーク・マンデビル

大会)の文字を参加国数分の星で囲んだシンボルマークが大会旗に載せられていた。1989年に国際パラリンピック委員会(以下「IPC」と略す)が設立され、1960年のローマ大会が正式に第一回パラリンピック大会と位置付けられることになったが¹、1964年東京大会、1968年テルアビブ大会、1972年ハイデルベルク大会では、車椅子の三つの車輪を組み合わせたシンボルマーク(図1)が使用されていた。この三つの輪はそれぞれ「Unity(団結)」「Friendship(友情)」「Sportsmanship(スポーツマンシップ)」を表している。



図1 1964年、1968年、1972年のパラリンピック大会で使用されたシンボルマーク
出典：Ludwig Guttman(市河宣恭監訳)、1983、『身体障害者のスポーツ』、医歯薬出版、34。

大会目標について触れられたメッセージの中で、「団結」は「世界中の麻痺に苦しむ人々が、国際的なスポーツ活動を通じてひとつになること」、「友情」は「スポーツを介して国家間の友情と理解の手助けをすること」、「スポーツマンシップ」は「スポーツマンシップの精神は、将来、何千人もの障害麻痺患者に希望と刺激を与えるだろう」と説明されている²。

1988年のソウル大会後に同大会のロゴたる五つの文様がパラリンピックのシンボルマーク(図2)となることが決定された³。



図2 パラリンピックシンボルマーク(1988年ソウル大会～1994年リレハンメル大会)
出典：IPC, “Seoul 1988,” <https://www.paralympic.org/seoul-1988/medals>, (September 7, 2019).

このデザインについては次のような説明がなされた。五つの文様は五大陸、五大洋を表し、上三つ、下二つに配された文様が表すWの文字は「世界(World)」を象徴し、そこには「調和」と「スポーツを通し世界中の障がい者が結束する」という意味が込められている。上下で横一直線に並ぶ文様はそれぞれに「平等」と「人間性」を意味し、さらに文様の波の形がもたらす躍動感、障がい者が積極的に活動することへの「意欲」

と「決意」を示している⁴。

しかしこのシンボルマークは、オリンピックの五つの輪をあしらったシンボルマークと類似性が高かったことから国際オリンピック委員会から問題視され、1994年のリレハンメル大会以降は、山型に同じ文様を三つ並べたマーク（図3）が採用された。このシンボルマークは「Mind（心）」「Body（身体）」「Spirit（精神）」を象徴している⁵。



図3 パラリンピックシンボルマーク（1996年アトランタ大会～2004年アテネ大会）

出典：Disabled World, “The Symbol for the Paralympics,” <https://www.disabled-world.com/sports/paralympics/symbol.php>, (September 7, 2019).

その後2003年のアテネにおける国際パラリンピック委員会の会合において、新しいシンボルマーク「スリーアギトス」（図4）を採用することが決まった⁶（2019年10月のIPCの新ブランド戦略の一環として「スリーアギトス」の色や線に変更と新たな表現「Change Starts with Sport」が加えられた）。



図4 パラリンピックシンボルマーク（2006年トリノ大会～）

出典：IPC, IPC VISION, MOTTO, SYMBOL,”https://www.paralympic.org/sites/default/files/document/120427151817794_Vision.pdf, (September 7, 2019).

この中心を囲む3本の線は躍動を象徴し、大会のために世界中の選手が一つになるパラリンピックムーブメントの役割を強調するものとされている⁷。こうした経緯を顧みると、障がい者がスポーツを通じて活動すること、世界の障がい者が一堂に集まりそこに連帯感と友情を育むことがパラリンピックの理念のひとつと言える。

2. 大会のスローガンに見るパラリンピックの理念

パラリンピックの理念は、実際には各大会を主催する都市とその国が大会のスローガンとして何を掲げるかによって示されてきたと考えることもできる。

過去には、大会スローガンが必ずしも明確に打ち出されていないときもあり、また、大会の準備段階あるいは大会中に使用されたものと、大会後の報告書において強調されるポイントが若干異なっているケースもあるが、明確にスローガンとして打ち出されたものに限って主な過去大会のスローガンを概観してみると、概ね次の三つの点がパラリンピックの意義ないし理念として打ち出されていることが見てとれる。なお、2006年大会以降はオリンピックとパラリンピックで共通のスローガンが使用されているが、ここではその共通のスローガンをパラリンピックのスローガンとして分析することとした。

第一は人々を覚醒させ、鼓舞し、感動させることである。「Passion lives here (情熱はここに息づく)」(2006年トリノ大会)、「inspire a generation (世代を超えたインスピレーション)」(2012年ロンドン大会)、「Passion. Connected. (情熱、一つに)」(2018年平昌大会)などのスローガンに表れている。

第二は人間の可能性の誇示である。「the triumph of the human spirit (人間精神の偉業)」(1996年アトランタ大会)、「no limits(無限)」(1994年リレハンメル大会)、「without limits (限界なし)」(2000年シドニー大会)などが例として挙げられる。

第三は団結の精神である。「A time to be together (共に過ごすとき)」(1976年トロント大会)、「One World, One Dream (同じ世界, 同じ夢)」(2008年北京大会)などがこれに該当するだろう。

これらを概観すると、パラリンピック大会の理念は人間の可能性の誇示によって、人々を鼓舞、激励、感動させること、並びに、団結の精神を人々が共有することにあると言ってよいであろう。

3. ルードヴィッヒ・グットマン博士の言辞に見る理念

1964年の東京大会の報告書は、パラリンピックの父と言われるグットマン博士の言として「失われたものをかぞえるな、残っているものを最大限に生かせ」を引用し⁸、それがパラリンピックの理念であるかのごとき記述を行っている。また、我が国の障がい者スポーツの関係者の中には、この言葉をパラリンピックの精神の原点として唱える者も少なくない。しかしながら、グットマン自身の著書あるいは長くグットマンの秘書を

務めたジョアン・スクルトン (Joan Scruton) の著書⁹、またスーザン・グッドマン (Susan Goodman) によって書かれた博士の伝記¹⁰のいずれにおいてもこの言辞を見出すことはできない。

中には、右の言葉はそうした趣旨の言をグットマンから聞いた大分市の太陽の家の創始者中村裕が、日本で流布させたものであるとの見方を聞くことがあるが、中村の詳細な伝記¹¹を見てもこの言葉は存在せず、この見方も明確な根拠を欠いている。

他方、中村のいわば先輩にあたる九州労災病院長であった内藤三郎は、すでに昭和32年 (1957年) の時点で「回復の不可能な障害者も残存機能の強化のための訓練をし、しかもその訓練にはスポーツを取り入れて、社会復帰するやりかた」を紹介しており¹²、グットマンの言の如き考え方はつとに日本の障がい者医療に携わる関係者間に広まりつつあったので、そうした人々のいわば共通認識を世間に広める言辞として「グットマンの言」が流布されたのではないかと考えられる。

ともあれ、しばしば「グットマンの言」と言われるこの言葉の原典がどこにあるにせよ、この言辞にパラリンピック本来の理念が込められていたと考えてよいであろう。

ただし、この言辞はパラリンピック特有の理念ではなく障がい者を鼓舞する言葉として、つとに欧州では広く共有されていたとみられることを忘れるべきではない。それが証拠に、1928年に発刊されたD・H・ローレンスの『チャタレイ夫人の恋人』の主人公チャタレイ夫人の夫クリフォードの言葉として、戦争で負傷して下半身不随となり車椅子生活を余儀なくされたが、「残っているものが、限りなく貴重だった」というのがある¹³。このように、障がい者の残存機能強化こそが障がい者を鼓舞するものであるという理念は、第一次世界大戦以降欧州では強く認識されていた考え方であったと見てよいであろう。

4. 開閉会式スピーチに見るパラリンピックの意義と理念

A. 1960年ローマ大会および1964年東京大会

1960年のローマ大会の開会式において、ローマ教皇ヨハネ23世は選手たちを称えて「身体に課せられた克服不可能に見える障がいにもかかわらず、エネルギーに満ち溢れた魂 (soul) が何を達成できるのかを示してくれた」と述べたが¹⁴、ここには「障がい者が障がいを克服して達成した姿」をパラリンピックで見ることができるところにその意義があるという見方が示されている。また、同大会でグットマンは「選手や付添人の大部分は、ローマ大会を完全に身体障がい者の社会およびスポーツ界への再統合 (re-integration) の新しい形 (pattern) と理解している」と述べ¹⁵、障がい者の社会的統合

がパラリンピックの理念の柱であることを表明した。

1964年の東京大会の開会挨拶において、グットマンは「その（この競技大会の）基本は常に3つの原則、即ち、友情、結合、スポーツマン精神にのっとっている」とし¹⁶、いわば大会のシンボルマークの解説にも似た言葉を述べた。他方、皇太子は開会挨拶において「世界中の身体障害者に希望と価値ある生活をもたらすストック・マンデビル大会の業績と精神に敬意を表す」と述べると同時に「スポーツがあなた方（障がい者）の心のささえとなり、社会復帰される早道であった」とも述べ、障がい者の社会復帰促進に果たすスポーツの役割を広く世間に認知させることが、パラリンピックの意義であるとの趣旨の挨拶をした¹⁷。また大会報告書は、パラリンピックを主として念頭に置きつつ身体障がい者スポーツ大会の意義として次のように総括している¹⁸。

身障者スポーツ大会の意義は、第一には身障者自身が、まず体力をきたえ、その体力や機能に自信をもつようになり、明るい希望と勇気を抱くようにすることで、グットマン博士も「失われたものをかぞえるな、残っているものを最大限に生かせ」といっているように、身障者のコンプレックスを解消させることである。第二には、一般社会に、身障者の可能性をみて貰って、関心と理解を深めることである。このことは、身障者の社会復帰に大きなすけとなる。第三には、スポーツを通じて、同じからだの不自由になやむ人たちが友誼と親睦を深め、お互いに励まし合って、一人一人の生活を向上させて行くようにすることである。

B. 2008年北京大会、2012年ロンドン大会、2016年リオ大会

2008年の北京大会の閉会式において当時国際パラリンピック委員会会長だったフィリップ・クレブブン（Philip Craven）は、「朋（友）遠方より来たる有り。また楽しからずや」という孔子の言を引用したが、これはパラリンピックの理念に友愛あるいは友情の絆を深めることが含まれていることを示唆したものと言えよう¹⁹。

また、同閉会式で北京オリンピック組織委員会主席の劉淇はパラリンピックの選手たちは、「自尊心（self-respect）」「自信（self-confidence）」「自己改善（self-improvement）」「自立（self-reliance）」といった人生に対する積極的な姿勢を示したと称賛したが、その際、上の四つに「剛勇（fortitude）」ないし「自己の運命の主人公（masters of their own destinies）」を加えた。このことに示唆されているように、障がい者アスリートの活躍が障がい者の自立心に刺激を与える点がパラリンピックの意義であるとの考えがにじみ出ていると言えるが、同時に劉は右に加え「パラリンピック大会に刺激を受けて（inspired）、30万人以上の北京の障がい者が一層社会に統合された」と述べ、さらに大

会は障がい者の主張 (cause) に対する社会の関心をかき立て、かつそれを促進するための大きな行事であると述べ、パラリンピックの社会的意味を強調した。同時にパラリンピックのおかげで公共施設のバリアフリーが改善され、また「我々の心の架け橋も作られた」という表現でソフト面の改善にも言及した。このスピーチは北京大会が深い社会的意義を持っていたことを強調するとともに、そうした意義こそパラリンピックの理念であるとの考えを含蓄するものであった²⁰。

2012年のロンドン大会においては傷痍退役軍人が閉会式でスピーチを行い、パラリンピックの「勝利とドラマ (triumphs and drama) に感動した」と述べ、パラリンピックの理念が「勝利の栄光」の確認でもあることを示唆した²¹。またロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会会長セバスチャン・コー (Sebastian Coe) はそのスピーチの中で、大会ボランティアの言葉を引用しつつ「パラリンピックは限界という名の雲を晴らしてくれる (The Paralympians have lifted the cloud of limitation)」といった表現で、障がいに伴う制限を取り払うことにパラリンピックの意味があるとの趣旨を述べた²²。

当時 IPC 会長であったクレーブンは、2016年のリオ大会閉会式のスピーチにおいてパラリンピックの選手たちの「前向きな姿勢 (attitude) によって、人間の身体 (human body)、とりわけ人間の心 (human heart) と精神 (mind) には限界がなくなり、あらゆることが可能になることを世界に向けて示してくれた」とし、パラリンピアンたちを「英雄であり、世界中の新世代のスポーツファンにとってロールモデル (role models) である」と称えた²³。

総じてロンドンおよびリオ大会におけるスピーチでは、選手たちが「障がいを克服」して素晴らしい成果を上げたことによる「鼓舞 (inspiration)」効果が強調され、そこにこそパラリンピックの意義があるとの見方が前面に出ていた。それに対し、北京大会ではパラリンピックがハード、ソフト面においても、障がい者の社会参加においても、あるいは社会の障がい者に対する態度においてもポジティブな効果を及ぼすことが強調されていた。そのことから、パラリンピックの理念や意義の解釈は大会の行われる国の状況にかなり影響されることが暗示されていると言えよう。

C. IPC が提示するパラリンピックの理念と意義

IPC はパラリンピックの理念ないし意義を「価値」(values) として、その年次報告書 (Annual Report) において提示している。2019年10月時点で IPC 公式ホームページ上で確認できる年次報告書の中では、2006年の年次報告書から、現行のパラリンピックの価値とされている「決意 (determination)」「勇気 (courage)」「インスピレーション

(inspiration)」「公平 (equality)」の文言が確認できる。2015年のIPC年次報告書より、パラリンピックの四つの価値について現行の説明がなされるようになった。すなわち、選手は自らこうした価値を体現あるいは堅持しているとして、「勇気」は「パラアスリートはそのパフォーマンスを通して、肉体的限界に挑むことの素晴らしさを世界に向けて表現すること」、「決意」は「アスリートは、可能性の限界を塗り替えるほどのメンタルの強さ、身体能力、卓越した敏しょう性などから生みだされる比類のない強さを備えていること」、「インスピレーション」は「ロールモデルとして、パラアスリートはその能力を最大限に発揮し、見る者を力づけるとともに、スポーツへの参加へとかき立てること」、「公平」は「スポーツを通して、パラアスリートは既存概念に挑み、変化をもたらす、障がい者の社会的障壁ならびに差別を打破することでインクルージョンを向上させること」と位置づけている²⁴²⁵。

この年次報告はまた、こうした価値を実現してゆく過程を「推進要因 (drivers)」「ゴール (goal)」「ビジョン (vision)」「目標 (aspiration)」の段階に分けて、選手の体現すべき価値が社会的インパクトを与えるようになるための道筋ないし指針を示している (図5)。

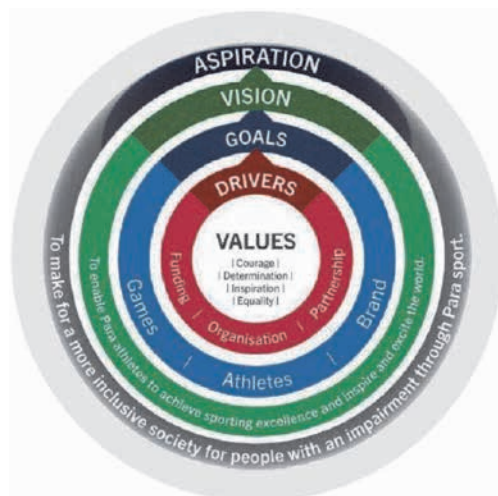


図5 IPCの目標、ビジョン、価値

出典：IPC, 2016, International Paralympic Committee Annual Report 2015, 11, https://www.paralympic.org/sites/default/files/document/161017094732962_2016_10_11+IPC+Annual+Report+2015+web+version.pdf, (September 6, 2019)；日本パラリンピック委員会, 2016, 『戦略計画2015～2018年 国際パラリンピック委員会の戦略的展望』, 14, https://www.jsad.or.jp/paralympic/what/pdf/ipc_strategic_plan_2015-2018.pdf, (2019年9月9日)。

しかしながら、こうした説明においても選手が体現している価値（「勇気」「決意」と障がい者も含め社会に与えるインパクト（「インスピレーション」「公平）」との関連

は必ずしも明確にされていない。むしろこうした四つの価値が並列されているため、エンパワーメントやインクルージョンといった社会的インパクトが選手個人の努力や能力による鼓舞を通して実現するかの如き印象を与えかねない点に留意すべきであろう。

5. 開閉会式の演出, メダル, 賛歌に見るパラリンピックの理念

パラリンピックの理念は、上述のスピーチや関係者の言辞に反映されているばかりではなく、開閉会式の演出、メダルの形態、あるいはパラリンピック賛歌などにも反映されていると見ることができる。それらを通じて浮かび上がるパラリンピック理念には次のようなものが挙げられる。

第一に、障がい者の社会参加を促すことがパラリンピックの一つの理念であることは、例えば1996年のアトランタ大会の開会式において次のような演出が行われたことに表れている。開会式での国歌斉唱は四肢まひの歌手が歌い、大会のホスト役は落馬事故で脊髄損傷者となったハリウッド俳優のクリストファー・リーブが務め、会場にパラシュートで降下したアメリカ軍の14名のうち、最後に降下したのはパラシュート事故により両足を切断した兵士であった²⁶。このように、障がい者自身が開会式で独自の役割を果たしたことは、障がい者の社会活動への積極的参加がパラリンピックの理念であることを暗示するものであったと言える。また、このような演出は障がい者の多様性を浮き彫りにする上でも意味があった。この点については、1992年のバルセロナ大会の開会式も同様であった。この大会で競技場へと聖火を運び入れたのは片腕のランナーであり、その後盲導犬を連れた視覚障がい者ランナー、脳性まひのランナー、車椅子に乗ったランナーへと聖火が次々に渡されたが、この演出は障がいの多様性を強調するものであった²⁷。パラリンピックはとかく、その原点との関係もあり車椅子競技に注意が向けられやすいため、障がいの多様性を人々に印象づけることはとりわけ社会的な意味が深いと考えられる。

またこの点に関して、メダルの形態が障がいの多様性に配慮したものであるか否かを見る一つの尺度として、点字表記の有無を各大会ごとに調査すると表1のようになり、夏季大会については2004年のアテネ大会以降必ず点字表記がなされていることは（視覚障がい者のパラリンピック参加を奨励する意味でも注目すべきであるが）障がいの多様性の理解と障がい者の社会参加の促進がパラリンピックの理念であることを間接的ながら裏書きしている。

表1 メダルに点字表記のあることが確認できたパラリンピック大会

夏季	冬季
トロント (1976年)	エンシェルツヴィーク (1976年)
ストーク・マンデビル・ニューヨーク (1984年)	アルベールビル (1992年)
ソウル (1988年)	リレハンメル (1994年)
バルセロナ (1992年)	長野 (1998年)
アトランタ (1996年)	バンクーバー (2010年)
アテネ (2004年)	ソチ (2014年)
北京 (2008年)	平昌 (2018年)
ロンドン (2012年)	
リオ (2016年)	

出典：Brittain, I., 2014, From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games, Common Ground Publishers; IPC, "PARALYMPIC GAMES," <https://www.paralympic.org/paralympic-games>, (September 06, 2019).

1964年の東京大会の際に作られたパラリンピックの賛歌「東京パラリンピックの歌」(小林潤作詞, 井上宣一作曲)は, パラリンピックが持つ国際連帯と友情の精神を「愛の力」「つなぐ力」「むすぶ力」と言った言葉で表現しているが, ここでは友愛と連帯の醸成がパラリンピックの理念であることが詠われていると言えよう²⁸。

一方IPCの公式パラリンピック賛歌「Hymn de l'Avenir (未来への賛歌)」は, 1996年にティエリー・ダルニス (Thierry Darnis) により作曲された。2000年シドニー大会開会式で, 自作の曲を歌い好評を博したオーストラリア出身のカントリー歌手グレアム・コナーズ (Graeme Connors) が, 大会後このパラリンピック賛歌に歌詞をつけ, 当時のIPC運営委員会がこれを「(将来パラリンピック大会の開閉会式などにおける) 定番の演目 (regular feature)」として認めたとされている²⁹。ここでは「困難に立ち向かい, 身体の強さ (strength in the body), 精神力 (power of the mind) を養うために努力をする」といった言辞とともに友愛や一体感といったことが強調されており, パラリンピックの理念が一堂に会して競技をすることから生ずる一体感や友情, そして強い身体と精神を育ててチャレンジすることがパラリンピックの意義の前提であると捉えられていると言えよう。

6. ファン・ヨンデ賞受賞者の功績から見るパラリンピックの理念

パラリンピックはその原点において障がい者のリハビリと社会復帰のための触媒としてスポーツを位置づけていた。しかし、パラリンピックの認知度が上がり、また競争力も上がるにつれて成績重視あるいはメダル重視の風潮が高まってきた。それに対してパラリンピックの社会的意義を重視し、メダルを獲得することだけがパラリンピックの本旨ではなくスポーツ上での業績を超えて世界を鼓舞し、また感動させた選手を特別に表彰する動きが生まれた。具体的には、自身も障がい当事者であり韓国で長年障がい者福祉のために活動してきた黄年代（ファン・ヨンデ）が1988年のソウル大会を機に創設したファン・ヨンデ賞である³⁰。したがって、この賞の受賞者の経歴・業績等を分析すれば自ら競技成績の向上以外にパラリンピックが持つ意義と理念があることを間接的ながら証拠立てることになると言えよう。

ファン・ヨンデ賞の受賞者について、経歴並び受賞理由として考えられるものを分析してみると大きくほぼ次の四つに分かれる。

第一は、夏季・冬季双方のパラリンピック大会に出場して複数のメダルを獲得するなど、類まれなる成績を残した選手。例えば、2000年受賞のドイツのマルティナ・ヴィリング（Martina Willing）や2010年受賞のカナダのコレット・ブルゴンジュ（Collette Bourgonje）がいる。

第二は「障がいの克服」がとりわけ困難でありそれを乗り越えた選手。例えば（a）複数の障がいを克服した選手として2002年に受賞したドイツのアクセル・ヘッカー（Axel Hecker）また上述ヴィリング。（b）身体障がいに加えてがんなどの病を克服した選手として2006年に受賞したアメリカのロニー・ハンナ（Lonnie Hannah）。（c）貧困など困難な環境を克服した選手の例としては2004年受賞の南アフリカのザネリ・シツ（Zanele Situ）、2006年受賞のウクライナのオレナ・イユルコブスカ（Olena Iurkovska）、2008年受賞のパナマのサイド・ゴメス（Said Gomez）などが挙げられよう。

第三は、自らの競技の成績を以て広く社会にインパクトを与える活動を行った選手、あるいは障がい者のパイオニアとして社会的な役割を果たした選手。障がい者として韓国で初めて大学で体育学を専攻した1998年に受賞したキム・ミージョン（Kim, Mi-Jeong）、牧師や作家としても活躍し2004年に受賞したオーストラリアのライナー・シュミット（Rainer Schmidt）、脳性まひ児などのための学校への募金活動をし、2008年に受賞した南アフリカのナタリー・デュ・トロワ（Natalie Du Toit）、ケニアにおけるパ

ラリンピックムーブメント、とりわけ女性の参加について社会的役割を果たし2012年に受賞したメアリ・ナクミチャ・ザカヨ (Mary Nakhumicha Zakayo)、困難な幼年期をロシアで過ごした後米国へ移住、障がいのある生徒のスポーツ参加への機会均等などを定める法律の制定に尽力し2016年に受賞したタチャーナ・マックファーデン (Tatyana McFadden) が挙げられる。

第四は「障がいの克服」について極めて印象的なあるいは象徴的行動をした選手。富士山に登頂し2010年に受賞した遠藤隆行、マラソンでグランドスラムを達成した上述マックファーデンなどが挙げられよう。

以上の受賞者やその背景を観察、分析するとパラリンピックは単に肉体的な「障がいの克服」モデルを提供するだけでなく、人生におけるさまざまな困難を克服したシンボルとなり得ることが暗示されている。他方、この賞が個人の業績を称えているため、ある種障がい者のヒーロー、ヒロインを育てており、そのこと自体が社会的意味を持っていると同時にこの賞ひいてはパラリンピックの社会的意味は各国の状況によって大きく変わり得ることが見てとれる。

7. 主な障がい者スポーツ国際総合大会の理念との比較

パラリンピックの理念を把握する一助として、特定の競技に限られない障がい者スポーツ国際総合大会が掲げているそれぞれの理念と比較することも必要であろう。比較対象としてここでは、デフリンピック、スペシャルオリンピックス、VIRTUS (旧 INAS) グローバルゲームズ、インビクタス・ゲームズ (Invictus games) を取り上げることとした。

デフリンピックについては、その運営団体である国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD: The International Committee of Sports for the Deaf) は、その憲章 (constitution) において国際障害者権利条約第5条および第30条を引用し、ICSDの使命として特にこれに従うとすることが記されている。同第5条は平等と無差別を謳っており、第30条は障がい者が文化、スポーツ活動などに参加することは障がい者の権利であることが明記されている³¹。従ってデフリンピックの理念もその源は障がい者差別の撤廃、障がい者のスポーツ参加の促進であることが窺える。また、デフリンピックの理念が「スポーツによる平等 (PER LUDOS AEQUALITAS)」であることから、ろうあ者が平等に扱われることをスポーツを通じて実現することが理念の中心であることが窺われる。

他方デフリンピックの目指すところとして重要な点は、ろうあ者の団結、国際的な連携、一体感の強化にある。この点はICSDの公式ホームページに、デフリンピックの原

点となった国際サイレント大会以来の歴史を回顧しつつ「世界全体のろうあ者コミュニティにおけるアイデンティティの確立」が使命の一つであったと述べていることにも表れていると言えよう³²。なおこうした、ろうあ者の「アイデンティティ」と「連帯の強化」がデフリンピックの理念であることは、デフリンピックがパラリンピックとは別に行われていることにも表れている³³。

スペシャルオリンピックスを見ると、その使命を「知的障害のある人たちに年間を通じて、オリンピック競技種目に準じたさまざまなスポーツトレーニングと競技の場を提供し、参加したアスリートが健康を増進し、勇気をふるい喜びを感じ、家族や他のアスリートそして地域の人々と、才能や技能、友情を分かち合う機会を継続的に提供すること」としている³⁴。

ここで注目すべきは、「年間を通じて」という点が特に強調されていることである。言い換えれば、スペシャルオリンピックスは4年ごとの世界大会もさることながら日常の継続的活動が重視されていることである。また「スポーツの力によって知的障がい者が新たな強み、才能、能力、達成感を見出し、選手がフィールドと生活の中で喜び、自信、満足感を得て、自分のコミュニティやその他の地域にいる人々の心を自分たちの才能や潜在能力に対し開かせること」が重要であるとしている³⁵。

なおスペシャルオリンピックスにおいては知的障がい者が相互にあるいは、健常者が知的障がい者とお互いに接触する機会を増やすことが大切であり、スペシャルオリンピックスムーブメントはそのための有益な機会を提供することに意味があるとされている³⁶。

上述のようにスペシャルオリンピックスは知的障がい者のスポーツ参加を主眼として、その結果得られる知的障がい者自身の「エンパワーメント (empowerment)」は、一見パラリンピックにおける障がい者の「エンパワーメント」と類似しているように見えるが、ここでは「障がいの克服」と「成果の達成」は必ずしも重視されておらず、また社会の理解に関してもいわゆるバリアフリーの達成などを最終目的とするものではない。すなわち、社会におけるハード面とソフト面が変化すれば障がいは障がいではなくなるといういわゆる社会モデルはそのままの形では知的障がい者には当てはまらない面があり、その意味でリハビリ、障がいの克服、達成という過程を経ることの多いパラリンピアンと必ずしもそうした過程を経ないスペシャルオリンピックスのアスリートとの間には理念の違いがあると言える。この点は別の言い方をすればパラリンピックが成果主義あるいはメダル重視に走りやすいのに反し、スペシャルオリンピックスはいわば参加に意味があると言える。そうであるならば知的障がいについてはパラリンピックとスペシャルオリンピックスを比較するよりも VIRTUS (旧 INAS) グローバルゲームズとの

比較の方が有益とも考えられる。

INAS (現 VIRTUS) のホームページによればビジョンのひとつに「知的障がい、自閉症やダウン症候群が最高レベルで戦うことの妨げ (barrier) になってはならないという信念」を掲げている。知的障がい者の社会におけるインクルージョンを重視、それを促進することがその役割であり、パラリンピックのメンバーとして、会員にその出場資格やクラス分けについて指導し、彼らがアスリートとして発展していけるように活動している³⁷。パラリンピック大会への知的障がい者の参加を支援しており、IPC との実務面での協力体制を築いている。

最後にパラリンピックが障がい者のリハビリと社会参加の一助としてスポーツを位置づけてきた歴史と関連して、いわゆる傷痍軍人のリハビリの一環とされるインビクタスゲームズ (Invictus Games) の理念との比較もできよう。

この大会に出場できる傷病軍人は、身体的傷害 (wounded, injured) だけでなく疾病 (sick) を患う者も対象となっているが、彼らを「スポーツの力を使い回復へと促し、リハビリをサポートすること」を目的としている。他方、この大会はその目的あるいは理念として「スポーツの力を通じて国家に奉仕した人々への広い理解と敬意を生むこと」³⁸を謳っている点でパラリンピックとは異なる理念を強調している。またそもそも大会名がラテン語で「征服されざる」あるいは「不屈」を意味しており、大会名が戦闘意欲 (fighting spirit) を表現していることはこの大会自体がひとつの「戦い」であり、第二の人生における「勝利」がかかっていることが暗示されている。

8. 全国障害者スポーツ大会の理念との比較

国内を見ると、1964年の東京大会（正式には第13回国際ストーク・マンデビルスポーツ競技大会）を契機として設立された日本身体障害者スポーツ協会（現日本障がい者スポーツ協会）は、1965年から毎年全国身体障害者スポーツ大会（2001年以降は全国障害者スポーツ大会（以下「全スポ」と略す））を開催してきた。その理念は公には1964年の東京大会が与えた効果にあるとされ「この大会に参加した身体障害者がスポーツを通じて体力の維持、増強、残存能力の向上及び心理的更生等の効果を図ること」並びに「一般国民については、身体障害者に対する深い理解と関心の高揚を図り」、その過程を通じて「身体障害者の自立更生の助長に寄与すること」とされている³⁹。これらの理念は、基本的にはパラリンピックの理念と相通じている。

元来スポーツは身体的動作を伴うものであり障がい者にとって身体能力の向上は、自立性の向上のみならず社会参加を円滑にするものであり、身体能力の向上を図ろうとす

る理念はパラリンピックと全スポに共通の理念であろう。現に全国身体者障害者スポーツ大会と全スポのスローガンには概観すると55回の大会中11大会で「はばたけ」「飛び立つ」と言った表現が含まれている。

しかしながらそうした理念を実現するにあたり、競争原理をどこまで導入しどこまで競技スポーツにおける優劣を競うことを奨励するかという点に関し全スポは公式な説明を行っていない。そもそも全スポの各選手団別の参加選手枠数は、各大会の選手全体数を基に、都道府県・指定都市ごとの身体障害者手帳および療育手帳の交付数に対する按分比率等により算出されたものであり、選手選考は、都道府県・政令指定都市の障がい者団体や障がい者スポーツ関係者からなる選手選考委員会で決められ、全国大会に出場したことのない選手を優先的に選出するなどの配慮が必要とされる。そのため、全国からの参加と運動能力の向上が主たる目的と見るべきであろう⁴⁰¹。

そうした理念は次のような面でも反映されている。全国身体者障害者スポーツ大会と全スポのスローガンにおいて勝利や栄光を謳ったものは1965年から2019年まで55回の大会中一回もない。1968年の福井大会のスローガンには「栄光」の文字があるが「忍耐と努力への栄光」とされ、「勝利の栄光」とはされていない。パラリンピックにおいてしばしば見られるような「人間の無限とも見える可能性」への言及も全くない。

その反面、全国身体者障害者スポーツ大会と全スポのスローガンでは「頑張る」「忍耐」「一生懸命」「努力」といった表現が散見され、パラリンピックにおける感動が少なくともそのひとつとして不可能に見えることを達成したことへの感動であるのに対し、全スポにおいては努力したこと、頑張ったこと自体が評価され感動を呼ぶことが期待されていると言えよう。

表2 全国身体障害者スポーツ大会スローガン一覧

回	開催年	開催地	スローガン
1	1965	岐阜	明るく つよく
2	1966	大分	敗北なき人々
3	1967	埼玉	愛と希望の祭典
4	1968	福井	忍耐と努力に栄光を
5	1969	長崎	自助の祭典
6	1970	岩手	あすを築く自立の祭典
7	1971	和歌山	希望にみちて たくましく
8	1972	鹿児島	がんばるぞ 熱と力と根性で

9	1973	千葉	「若潮大会」くじけるな まけるな 強く胸張って
10	1974	茨城	「まごころ大会」友愛と希望で結ぶ集いの輪
11	1975	三重	友愛の輪から わく夢 わく力
12	1976	佐賀	「若楠大会」がんばってはげましあってわく希望
13	1977	青森	ひろげよう 愛の輪 夢の輪 力の輪
14	1978	長野	「やまびこ大会」さわやかに あたたかく ひたむきに
15	1979	宮崎	ふれあう心あふれる力のびゆく郷土
16	1980	栃木	やります できます このからだ
17	1981	滋賀	「びわこ大会」わたしにもこんな力が生きがいが
18	1982	島根	「ふれあい大会」手をつなぎ 心をつないで わく力
19	1983	群馬	「愛のあかぎ大会」飛びだそう 今 ひかりの中に
20	1984	奈良	「わかくさ大会」この力伸ばそう生かそうたくましく
21	1985	鳥取	「わかとり大会」はばたこう 夢と希望の輪をひろげ
22	1986	山梨	「ふれあいのかいじ大会」やまなみに ひびけ とどろけ このちから
23	1987	沖縄	「かりゆし大会」翔べフェニックス 紺碧の空に
24	1988	京都	「愛とふれあいの京都大会」さわやかな汗よ 笑顔よ 友情よ
25	1989	北海道	「希望と友愛のはまなす大会」君がうて 希望の鐘をエルムのまちに
26	1990	福岡	「ときめきのとびうめ大会」ふりむくなちからの限り飛び立とう
27	1991	石川	「ほほえみの石川大会」ほほえみに 広がる友情 わく力
28	1992	山型	「輝きのべにばな大会」思いっきり のびやかに さわやかに
29	1993	徳島	「躍動のうずしお大会」今、飛び立とう 友と心の手をつなぎ
30	1994	愛知	「ゆめびっくあいち」あなたがタッチ 心のバトン
31	1995	福島	「うつくしまふくしま大会」つなぐ手に あふれる感動 わく勇氣
32	1996	広島	「おりづる大会ひろしま」げんき かがやけ!
33	1997	大阪	「ふれ愛びっく大阪」ときめいて今 はばたいて未来
34	1998	神奈川	「かながわ・ゆめ大会」あなたと握手 あなたに 拍手
35	1999	熊本	「ハートフルくまもと大会」がんばるが、いっぱい。
36	2000	富山	「きらりんびっく富山」自分にチャレンジ! あしたにチャレンジ!!

出典：公益財団法人日本障がい者スポーツ協会，2019，『障がい者スポーツの歴史と現状』，10-11，https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2019_web.pdf，(2019年9月7日)。

表3 全国障害者スポーツ大会スローガン一覧

回	開催年	開催地	スローガン
1	2001	宮城	「翔く・新世紀みやぎ大会」感動体感2001
2	2002	高知	「よさこいピック高知」みつけて夢 活かして力
3	2003	静岡	「わかふじ大会」静岡でかなえよう夢 つたえよう感動
4	2004	埼玉	「彩の国まごころ大会」ともに感動！ ともに笑顔
5	2005	岡山	「輝いて！おかやま大会」あなたがキラリ☆
6	2006	兵庫	「のじぎく兵庫大会」はばたこう ともに今から ひょうごから
7	2007	秋田	「秋田わか杉大会」きっと出会える！夢と感動
8	2008	大分	「チャレンジ！おおいた大会」笑顔、元気、ともに未来へ 新たな一歩
9	2009	新潟	「トキめき新潟大会」トキはなて 君の力を 大空へ
10	2010	千葉	「ゆめ半島千葉大会」ゆめ半島 みんなが主役 花咲く笑顔
11	2011	山口	「おいでませ！山口大会」君の一生けんめいに会いたい
12	2012	岐阜	「ぎふ清流大会」輝け はばたけ だれもが主役
13	2013	東京	「スポーツ祭東京2013」東京に多摩に島々に羽ばたけ アスリート
14	2014	長崎	「長崎がんばらんば大会」君の夢 はばたけ今 ながさきから
15	2015	和歌山	「紀の国 わかやま大会」躍動と歓喜、そして絆
16	2016	岩手	「希望郷いわて大会」広げよう 感動。伝えよう 感謝
17	2017	愛媛	「愛媛つなぐえひめ大会」君は風 いしづちを駆け 瀬戸に舞え
18	2018	福井	「福井しあわせ元気大会」織りなそう 力と技と美しさ
19	2019	茨城	「いきいき茨城ゆめ大会」飛べ はばたけ そして未来へ

出典：公益財団法人日本障がい者スポーツ協会，2019，『障がい者スポーツの歴史と現状』，13，https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2019_web.pdf，（2019年9月7日）。

おわりに

以上の観察あるいは分析を通して見るとパラリンピックの理念の原点である「スポーツを通じてのリハビリによる障がいの克服」と「国際的連帯の促進」というグットマンの理念からはじまったパラリンピックは、時代と共に高度な競技能力の発揮による「感動」に重点が置かれ、そうした「感動」が障がい者自身の能力発揮と社会参加の象徴として、また障がい者をめぐる社会環境改善への触媒として大きな意味を持つと見なされ

てきたと言えよう。

こうした歴史的過程はその裏面として障がい者を「障がい者」としてではなく、「アスリート」として評価をする傾向を生み、パラリンピックを障がい者のスポーツ大会から「障がい」をひとつの参加基準としてはいるが、特別あるいは独自の国際スポーツ大会にいわば「変身」せしめつつあるとも言える。

従ってそうした「独自」の大会理念や意義には必ずしも「障がい」と直接関係しないものも含まれるとしても不思議ではない。パラリンピックのロゴや大会のスローガンに、直接的には「障がい」が明示されていない傾向があることはこの点を暗示していると言えよう。また、いずれにしてもパラリンピックの理念は時代と共にまた、大会の開催される年の社会状況如何によって変わっていることに注目せねばならないであろう。

参考引用文献

- 1 日本パラリンピック委員会公式ホームページ, 「パラリンピックとは」, <https://www.jsad.or.jp/paralympic/what/history.html>, (2019年10月18日)。
- 2 Guttman, L. (市河宣恭監訳), 1983, 『身体障害者のスポーツ』, 医歯薬出版, 34。
- 3 IPC, “Seoul 1988,” <https://www.paralympic.org/seoul-1988/medals>, (September 7, 2019).
- 4 Brittain, I., 2014, From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games, Common Ground Publishers, 154.
- 5 IPC, IPC VISION, MOTTO, SYMBOL, https://www.paralympic.org/sites/default/files/document/120427151817794_Vision.pdf, (September 7, 2019).
- 6 IPC, “Athens 2004,” <https://www.paralympic.org/feature/no-18-agitos-paralympic-symbol-unveiled>, (September 7, 2019).
- 7 IPC, “The Paralympic Symbol - What Does The Agitos Mean?” <https://www.paralympic.org/video/paralympic-symbol-what-does-agitos-mean>, (September 7, 2019).
- 8 障害者保健福祉研究情報システム, 「国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書 No.2」, <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/jsad/z16002/z1600202.html>, (2019年9月5日)。
- 9 Scruton, J., 1998, Stoke Mandeville: Road to the Paralympics, The Peterhouse Press.
- 10 Goodman, S., 1986, Spirit of Stoke Mandeville: Story of Sir Ludwig Guttman, HarperCollins Publishers.
- 11 中村裕伝刊行委員会, 1988, 『中村裕伝』, 中村裕伝刊行委員会。
- 12 同上, 49。
- 13 D・H・ロレンス (伊藤整訳), 1996, 『完訳 チャタレイ夫人の恋人』, 新潮社, 7。
- 14 Brittain, I., From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games, 55.
- 15 Bailey, S., 2008, Athlete First: A History of the Paralympic Movement, Wiley and Sons, 26.
- 16 障害者保健福祉研究情報システム, 「国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書 No.2」。
- 17 同上。
- 18 障害者保健福祉研究情報システム, 「国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書 No.1」, <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/jsad/z16002/>

- z1600201.html, (2019年9月5日)。
- 19 China Daily, “Full Text of Speech by IPC president Craven at Beijing Paralympics Closing Ceremony,” September 17, 2008, http://www.chinadaily.com.cn/paralympics/2008-09/17/content_7036101.htm, (September 05, 2019).
 - 20 China Daily, “Full Text of BOCOG President’s Speech at Closing Ceremony of Beijing Paralympics,” September 17, 2008, http://www.chinadaily.com.cn/paralympics/2008-09/17/content_7036061.htm, (September 05, 2019).
 - 21 Brittain, I., From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games, 273.
 - 22 Global Times, “LOCOG chairman Sebastian Coe’s Speech at Closing Ceremony of London Paralympics,” September 10, 2012, (September 6, 2019).
 - 23 IPC, “IPC President’s Speech at Closing Ceremony of Rio Games,” September 18, 2016, <https://www.paralympic.org/news/ipc-president-s-speech-closing-ceremony-rio-games>, (September 6, 2019).
 - 24 IPC, 2016, International Paralympic Committee Annual Report 2015, 11, https://www.paralympic.org/sites/default/files/document/161017094732962_2016_10_11+IPC+Annual+Report+2015+web+version.pdf, (September 9, 2019).
 - 25 日本パラリンピック委員会, 『戦略計画2015～2018年 国際パラリンピック委員会の戦略的展望』, https://www.jsad.or.jp/paralympic/what/pdf/ipc_strategic_plan_2015-2018.pdf, (2019年9月9日)
 - 26 Brittain, I., From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games, 199.
 - 27 Ibid., 175.
 - 28 財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会, 昭和40年 (1965), 『パラリンピック 東京大会報告書』, 174。
 - 29 IPC, 2001, The Paralympian, 4.
 - 30 Whang Youn Dai Achievement Award Official Site, <http://whangaward.org/en>, (September 6, 2019).
 - 31 Deaflympics, “Constitution,” <https://www.deaflympics.com/icsd/constitution>, (September 7, 2019).
 - 32 Deaflympics, “Pioneers and Leaders,” <https://www.deaflympics.com/icsd/pioneers-and-leaders>, (September 7, 2019).
 - 33 小倉和夫, 2018, 「デフリンピックの歴史, 現状, 課題及びパラリンピックとの比較」, 『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』, 8, 1-25。
 - 34 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本, 「SON について」, <http://www.son.or.jp/about/index.html>, (2019年9月7日)。
 - 35 Special Olympics, “About Our Mission,” <https://www.specialolympics.org/about/our-mission>, (September 7, 2019).
 - 36 小倉和夫, 2018, 『『スペシャルオリンピックス』試論：スペシャルオリンピックスの原点, 特徴, 社会的意義と課題についての今後の調査研究並びにパラリンピック, デフリンピックなどとの比較研究の促進のために』, 『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』, 9, 20。
 - 37 INAS, “Our Vision,” <https://inas.org/about-us/who-we-are/who-we-are>, (September 7, 2019).
 - 38 Invictus Games Foundation, “Top page,” <https://invictusgamesfoundation.org>, (September 7, 2019).

- 39 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会, 2019, 『障がい者スポーツの歴史と現状』, 9, https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2019_web.pdf, (2019年9月7日)。
- 40 いきいき茨城ゆめ大会公式ホームページ, 1個人競技参加意向調査票(様式1)記入要領, <https://www.ibarakikokutai2019.jp/wp-content/uploads/2018/06/01-sankaikoutyousakinyuuyouryou.pdf>, (2019年10月18日)。
- 41 笹川スポーツ財団, 2014, 平成26年度文部科学省「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)」報告書, 59, http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2014_report_23.pdf, (2019年10月18日)。